巻頭言

言語の変化と変異 Language Change and Language Variation

名古屋大学　国際教育交流センター長
町　田　　健

世界で使用されている言語の数は約７千にも上ると言われるが，それぞれの言語は，さらに方言に分化している。イギリスの英語が非常に多くの方言から成ることはよく知られている。これに対し，アメリカ合衆国の英語は，方言的差異を免れているということではないものの，イギリスに比べると方言差は小さい。ブリテン島の英語が紀元後５世紀以来のものであるのに対し，英語がアメリカに導入されたのが17世紀の初めに過ぎないのだから，これは当然のことである。

言語が方言に分化しているのは，世界に多数の言語が存在するのと同じ理由によることは間違いないが，その理由が何であるのかは，未だに解明されていない。40億年前に誕生した生命が，現在のように驚くほど多様な種類の生物を産み出すように進化したのは，突然変異によるとされるが，突然変異がなぜ起こるのかについては，説得的な説明はない。言語の分化が言語の変化に由来することについて問題はないだろうが，言語変化の原因は，生物の進化の究極的な原因と同様に，まだ誰も説明できていないし，もしかしたら永遠に説明できないのかもしれない。

日本語も非常に多くの方言に分化しているが，日本語の祖先に当たる言語を話す人間たちが日本列島にやってきた時には，方言的差異はないか，あっても僅かであったはずである。日本人の祖先がどこから日本列島に来たのかは分かっていないが，台湾から沖縄諸島を経て日本本土にたどり着いたのであれ，朝鮮半島を経て九州北部に来たのであれ，とにかく九州あたりから，日本語が列島全体に広がっていったのではないかと考えられる。

日本語がその後どのような分化を遂げたのかは，文献的史料もないので，全く分からない。いずれにしても，日本語最古の文献が登場する紀元後８世紀までには，日本列島各地で多様な方言が使用されていたことは間違いない。そしてこの時代までは，邪馬台国のように一部の地域で大きな勢力を誇った国家的単位の方言が，周囲の方言に比べて高い威信を持って使用されるような例はあったかもしれないが，日本列島の広い範囲で共通に使用される，現代の標準語のようなものはなかった。

しかし８世紀の終わりに都が京都に置かれ，日本語を表記するための仮名が発明されると，事情は相当に変わってくる。公文書は漢文で書かれていたとは言え，文字によって表記された書き言葉は，文献を通じて全国に広まることになる。そして，その書き言葉は，首都である京都の方言を基礎とするものであった。こうして日本語にも，標準語の原型に当たるものが誕生することになる。この原型的標準語を，鎌倉時代の吉田兼好も，室町時代の世阿弥も，江戸時代の井原西鶴や松尾芭蕉も，時代が下っても同じように使っていた。

当然のことではあるが，大多数の民衆は文字を読むことができなかったのだから，このような原型的標準語を知ることはなく，自分たちの住む地域の方言のみを使って生活していた。この状況を一変させるのが明治維新である。明治政府は，効率的な全国支配を達成するために，各地に創設された小学校における国語教育を通じて，今度は東京方言を基礎として形成された標準語を普及させることに力を入れる。標準語教育はこれ以後も絶えることなく継続され，その結果現代では，誰もが標準語を使用することができるようになっている。標準語には，方言が持つ地域性がないから，各地の習慣や風俗を反映させることは難しい。このため，方言使用者にとって標準語には親しみが湧かないということになるのではあるが，日本が，政治・経済・文化などのあらゆる側面で体系性を有する国家として，支障なく運営されていくために，標準語がもたらす恩恵は計り知れないものであり，今後も必要不可欠の要素として，標準語の教育は継続されていくべきであろう。